



この花の涯まで



泉海紫乃

私が藤花歌劇団のお衣装部に入ったのは、女学校を出てすぐだった。

実家は代々呉服屋だったが、商才の塊だったという祖父は先見の明があったのか、早々に貿易関係にも少々手を出し洋服を取り扱うようにもなった。そのため我が梅岡家は、私が生まれた時には既に洋服に馴染みのある家だった。それどころか、呉服屋時代からのお得意様は引き続きドレスなどもうちで仕入れてくれたため、時代の波に潰されることなく営業して来ていた。

父も、祖父と同じように今の時代より先を行く人間だ。母も「これからは女も仕事ができなくては」と度々口にしており、私は小さい頃から衣料のいろはを叩き込まれてきた。

なんとなく両親の話聞いていた私の運命が変わったのは、十歳の時、藤花歌劇団のある公演を観に、はるばる神戸まで母と旅行したことがきっかけだった。大正の初めの頃、未婚の女性のみで構成された神戸の劇団——その煌

びやかで美しいこと。奇しくも私が生まれたのと同じ大正三年に第一回目の公演を行ったということにも、何か運命めいたものを感じずにはいられない。一目で魅了された少女の私は、観劇の帰り道、母に言ったのだった。

「私、決めました。藤花のお衣装を作ります！」

てつきり藤花のスターにでもなりたいと言いつすかと思つた母は、一瞬遅れてから声を出して笑つた。それでこそ梅岡の女です、と。その話を聞いた父も喜び、それまで以上に布、裁縫、ドレス、着物、作り方から着方、デザインまで叩き込まれるようになった。

かくして、お衣装の英才教育を受けた私は、女学校を出て藤花歌劇団のお衣装部に就職することになった。

「駄目よ水乃ちゃん、合わないわ。直してちょうだい」

「あら、あんなに入念に確認していたのに……」

本番と同様のお衣装をつけてのお稽古の後、同郷の娘役である倫ちゃん——鈴宮倫子が泣きついて来た。芸名を湊りんとしていた彼女も、今年でもう入団五年目だ。ようや

く初めて大きなお役がついたのだと張り切っていたのだが、その重圧のあまり、ここ最近ろくに食べられていないらしい。お陰でお衣装のドレスは布が余ってしまったている。

「まあ確かに、このままじゃ格好悪いわね」

「お父様とお母様が横浜から観に来るのよ、これじゃみっともなく駄目だよ」

「泣かないで、ちゃんとお直しできますから」

この劇団で舞台に立つ側の人間は、当然のことながら良家の女子が多い。私のような裏方に対してはそっけない子も多い中で、倫ちゃんは対等に接してくれる数少ない舞台を作る仲間だ。私より二年早く入団しているが、同い年ということで公私共に親しくしてくれている。

大正末期から劇団の肝いりの策だった東京劇場の設立。昭和も十年目を目前に、今年頭によくやく東京藤花劇場が完成した。とはいえ、まだまだ劇団の中は関西の人間がほとんどだ。私や倫ちゃんのように関東出身の者がいないわけではないが、比率は少ない。

だからと言って、それだけで爪弾きにされるわけではない。けれど、やはり同郷の人間が近くにいると言うのは心

強い。入団当初、なかなか友人もできなかった私にとつて、なんでも話せて、かつ劇団の色々な情報を提供してくれる倫ちゃんはあるがたい存在だった。

「そういえば水乃ちゃん、まだ東京の劇場には行ったことなかったかしら」

「ええ、日比谷でしょう。昔はよく銀座には行ったわ」

「私もね、まだなのだけれど、桃組にすごい子が入ったらしいわ」

「すごい子？」

「今年の春に入団したばかりなのに、お歌で一場面もらったんですって。この間の八月の公演よ」

「まあ……それは……」

入団五年目の倫ちゃんさえ、今回初めて一つのお芝居で通しの役をもらったばかりである。余程お歌がお上手なのか、容姿に華があるのか、はたまたま。

「華族様らしいわよ。依怙鼻屑ですって。大金が動いたとかあなたか」

「ああ……」

そんなものあるかしらね、と倫ちゃんはさつぱりと突っ撥ねる。ここが依怙鼻屑だけでやって行けるほど甘い場所

ではないことを、彼女は肌で感じて知っているからだ。いくら容姿が美しかろうと、芝居が、歌が、ダンスが、全てが上手くなければ人気は出ない。劇場に足を運ぶ大衆の目を、容姿や身分で誤魔化すことはできないのだ。

お衣装を直しながら、倫ちゃんは話を続ける。

「まして、私たちはお客様に夢を見せるフェアリーよ？ 華族なんて身分を振りかざして売るのは夢がないわよね」

「ええ、ええ、そうだわ。貴女たちはみな、等しくフェアリーですもの」

藤花歌劇団に所属する男役、娘役はみな、在団中は生徒と呼ばれるが、もう一つ異名を持っている。それが妖精——フェアリーである。いつからそうのように呼ばれているかは定かではないが、本人たちの浮世離れた美しさ、それに相応しい華やかな舞台とお衣装、それらを一度見てしまえば、確かに彼女らはみな妖精なのだと思わざるを得ない。

ここではみな、本名ではなく芸名を名乗り、容姿端麗さだけではなく品行方正さも求められる。舞台を降りてからも清らかさと美しさを保ち続けなければならず、それはこの藤花を退団するまで——いや、退団してからも求められ

る要素である。夢と霞を食べて生きてるとさえ錯覚させるような完璧さではあるが、そうは言ってもここは女の園。色々なことがないわけではない。倫ちゃんのように女の園特有の問題を煩わしく思う者もないではない。だが、ただでさえ女が集まれば複雑だというのに、そこに輪をかけてプライドの高い良家の女子が多く集まれば、僻みややっかみが生まれやすいのである。

「さあ、終わったわよ。これで倫ちゃんの体の線にもびつたり合うし美しいわ」

「ありがとう！ 流石、私の一番信頼しているお衣装の先生」

「まだ三年目よ、先生だなんて早いわ」

倫ちゃんは度々私を「先生」と呼ぶ。いずれは衣装デザイナーも手掛けたいとは思っているが、まだ三年目の平社員にはそのような大きな仕事は回って来ない。もちろん、実家でも滅多にお目に掛かれないような生地や素材に出会える度に興奮する。お衣装を一つ一つ作り上げることもやりがいは感じるし、それを見事に着こなす彼女らを見ることも何よりの私のやりがいにもなっている。

こうした下積みがいずれ大きな仕事へと繋がるのだと信